

未来の子ども達のために

天野 暉

激動の1900年代は終わりを告げ、新しいミレニアムに入りました。全国の会員の皆様にはお元気で新しい年を迎えられたことと心からお慶び申し上げます。

昨年は少子高齢化社会の行方について各方面で詳しく議論されました。しかし、ともすれば高齢者対策の方が重視され、少子化対策はなおざりにされて来たような気がしてなりません。もちろん、敗戦後の日本の再建に生涯を捧げられた高齢者に対して手厚い処遇をすることは大切なことです。しかし我が国の未来、それも比較的近い未来の急激な社会変革に思いを馳せるとき、バブルが弾けて経済的に厳しい状況は分かるにしても、もっと子どもに温かい手を差し伸べるべきだと思うのは私だけではないでしょう。子どもは未来の宝であり、日本の将来は彼らの双肩にかかっています。少子化社会対策基本法案が国会を通過し、小児保健法などが策定される日の一日も早くからんことを心から祈念しております。

思い起こせば昨年は「子どもの心」相談医制度を立ち上げ、優秀な担当者が協力して企画、立案された結果、極めて短期間に実行に移し、500名を超える熱心な会員が参集して相談医の資格を取られました。この事業については政府、日医、マスコミを初め各方面から高い評価が得られ、執行部も感謝しておりますが、事業を継続して実行し、また関連諸団体との連携を一層強化することなどがこれからの課題となることでしょう。

先日の中全理事会でご議論いただいて決定したこと

ですが、本年度からは「小児救急」の問題を全国的に取り上げて行きたいと考えています。都道府県により、あるいは地域によっては現在すでに順調に機能しておられるところもあると承知しています。そのような先覚の地域からは貴重なノウハウを教えていただければと思います。さらにそれぞれ地域特性や自治体の現状などを踏まえたうえで社会保険制度や医療法、児童福祉法などにも踏み込んだ議論を重ねて、少なく生まれた貴重な命を救う努力をしたいと思っています。

思えば、歴史上、子ども達が本当に幸せだった時代があったのでしょうか。地震や噴火、洪水などの天災による住居の喪失や飢饉などでまず犠牲になったのは子ども達でした。戦争や地域紛争、内乱などもやはり子ども達が被害を受けました。地域によってはいまだに猖獗を極める感染症でも、真っ先に子ども達が死出の旅路につきます。さらに最近では家庭内の虐待や、誘拐などの問題がクローズアップされ、各種の事故による死亡とともに社会問題化して来ました。

そこで本年を21世紀への助走の年と捕らえ、来世紀こそは世界中の子ども達に本当の幸せをプレゼントできるよう我々小児科医は頑張っていきたいと思っています。

